

トポスにおける発達

第 5 回

— 声と言葉 —

藤 隆

声の響く範囲としてのトポス

言葉は声である。小さい子どもにとつては確かにそうだ。文字による表記また印刷物は、現代の社会では、子どもの世界でもあれ、早くから接している。だが、たとえ文字の読める子どもでも決してその生活の中心を占めることはありえない。いや、ほとんどの大人にとつてもそうである。声により言葉を交わすことが生活の中で大事な位置を占めている。そもそも、人と人との関係を維持することが言葉によつているのであり、声を発し、声を聞くことである。声による言葉を文字に直して手紙としてやり取りをしても、同時性が保てないし、表情や身振りが伝わらない。だが、もっと本質的なことは、声 자체が響かないために人の関係の形成が難しいということである。

小さい子どもは、現代の文字文化の中に暮らしているのではあるが、文字が読めない、また読めても十分に活用したりはしないために、また直接的な人との接触を求めることがあって、圧倒的に声による言葉に

よつて生きている。しかし、それがいかなる様相を示しているのかは、ほとんど検討を受けていない。おそらく、今まで「幼い」とされていた特徴が実は声の文化の特徴もあり、確かに幼児の未熟さがあるにせよ、その未熟さは声の文化に適応するのに具合のよい面も持つていることが分かるだろう。

文字を読むこと、書くこともその元にある声を聞いているのもある。声の世界に根ざした読み書きであるからこそ、それが生きたものになり、生活と結びついたものとなり、その人の言葉となる。言葉とは、声を交わす関係から発生するものだからである。

トボスという観点から見たときに、声は二重にトボスを定義する。一つは、声の響く元である身体である。声は口から出て、耳で聞かれる。そこで聞こえるものは、身体という共鳴器により増幅されたものである。その上、身体は単なる増幅器ではない。声の発する元であり、声の届く先である。声が身体から発せられるからこそ、声に表現された考えはその人の内面か

ら発せられたものとして受け取られ、つまり深みを持つたものとなる。声が人格を具現化し、人格同士の関係を生きたものにするのである。

もう一つは、声の届く範囲としてのトボスである。語り掛ける声は機械的に増大されない限り、ある距離、高々、数メートルから十数メートル程度までしか届かない。普通の家庭の部屋の広さであり、幼稚園の保育室の広さである。大声を出しても、五十メートルはあるからこそ、それが生きたものになり、生活と結びついたものとなり、その人の言葉となる。言葉とは、声を交わす関係から発生するものだからである。

核家族の住む家ならば、大声を出せば家中に響いてしまう。声の届くことが人と人とが直接に語り合える距離にあるということである。顔を合わせての直接的な関係を構成できる場の範囲がそこで決まってくる。

声は、ボールを投げるようになから発して誰かに届く。同時に、その届く過程でまわりに波紋のように広がり、その場を音で埋め尽くす。コンサートホールが交響楽団の奏でる音で充満するように、もっとスケールは小さくとも、どんな声もその場を埋め、その場に

ある人を結び付ける。同じ声に浸る者としての関係が生まれる。声を発する人も、自らの声を聞き、その反響を聞くことにより、自分の声の中に浸るのである。声は発する人、語られる人という焦点を持ちながら、その場に満ちたものになる。

さらに細かく言えば、ささやき声、普通の声、大声、どなり声などに応じて、距離をさらには親密さを分けることが出来る。ささやき声は声が小さく、その外にいる人を排除すると同時に、声が息と混じり、息も掛かるような関係であることを意味する。大声は多くの人を相手にする場合に使われる。声の大きさや通りやすさを基に、その声が求めるトボスの範囲を推定できることになる。だが、この問題の検討以前に、声が言葉として持つ特質そのものを把握しなければならない。

言葉の何よりの特徴は、リアルタイムで発生し、消えていくということだ。音は常に、聞こえたときには既に消えようとしている。声を録音しない限り後に残すことは出来ない。一回限りの出来事である。声を印刷物のように何度も見返したり、遡ったり、見比べたりは出来ないのである。仮に録音したところで、聞き直すときにはやはり同様に生じては消えていく。

声の文化

声に基づいた言葉の文化と文字に基づいた言葉の文

化を対比して、最も明晰に論じたのが、オングである（W・J・オング 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店）。オングは、古代ギリシャ以来の西洋の歴史的な研究から文字と印刷に基づいた文化によってそれ以前の声による文化が消えていきまた変容していく様子を描いている。文字文化による発想からの従来の歴史研究を批判し、その再検討を促しているのである。その中で明快に声の文化の特質を抽出している。それを紹介し、現代日本での幼児について、それがどのように適用できるかを考えてみよう。

言葉を発することは声を出すことであり、声を出す

ことは行動することである。行動とは身体を用い、力

を振る、対象に対して相手に対して働きかけることで

ある。同時に、自らの内から発するのであり、力動的

なものである。

声による言葉は、記憶することに対して負荷が大き

い。沢山のことを覚えなくてはならない。紙に記した

文字を見直して考えたり、以前の記憶を辿ったりは出来ない。誰かを相手にしての会話にしてもその流れを

覚えている必要がある。まして、昔話や古代ギリシャ

のホメーロスといった伝承的な長い話となれば、特殊

な記憶のための工夫を施さないと覚えきれない。近年

の研究では、忠実に以前通りのことを再生するのではなく、その場に応じての変奏を行っているようなのだが

が、それでも膨大な記憶の量である。その秘訣の

一つは、すぐに口に出るような記憶しやすい方法に基づいた型通りの言葉、決まり文句を多用し、またリズ

ミカルな言葉を利用することである。

以下に、オングの整理による声の文化の特徴を挙げよう。

(1) 累積的である

複雑な構文ではなく、「そして」でつながるような次々につなげていく言い方をする。

(2) 累積的である

決まり文句としてまとまつた表現をする。例えば、「勇敢な兵士」、「頑丈な櫻の木」といった決まり文句は覚えやすく、使いやすい。

(3) 冗長であり、多弁である

言葉は発せられすぐに消えていく。話の筋を辿っていくには、ゆっくりと進んでいく必要がある。直前に言われたことを

繰り返しつつ、進むのである。

そこで、聞き手にとって聞き損なつても補える。話し手も繰り返す間に次の言うべき」とを考



えられる。

(4)保守的であり、伝統主義的である

長い間を掛けて記憶したことを口に出すことになる
と、昔の繰り返しになりやすい。話はその時々の状況
で変えられていくにしても、それは、手持ちの決まり
文句やテーマを組み替えていくのである。

(5)生活世界への密着

生活の中でそれに密着した形で使われる。観察し、
実践し、その中で言葉によるやり取りや説明がなされ
る。

(6)互いに競い合う

言葉や知識を他者と競い合う形で用いる。諺やなぞ
なぞは言葉による知的な競い合いのための武器であ
る。一人がなぞなぞを出せば、もう一方も別ななぞな
ぞを出して、挑戦に応じる。自慢をし合い、賛辞を交
換する。

(7)感情移入的であり、参加的である

学ぶということ、知るということは対象との密接で

感情移入的で共有的な一体化を行うことである。それ
と一緒になるということである。相手の反応は単に個
人的主観的なのではなくて、共有的な反応の中に共に
包まれるものである。

(8)恒常性維持的である

もはや現在とは関係のない記憶は捨て去る。言葉は
今ここで用いられている生活の状況によって統御され
る。状況は、他の語のみならず、身振り、声の抑揚、
顔の表情、さらに、全人間的な状況をすべて含むので
ある。語の意味は絶えずその現在から発している。

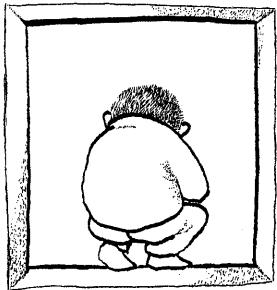
(9)状況依存的である

概念が実際の状況で使われるものとして理解され、
用いられる。

単独、対話、共同

オングの議論から、小さな子どもを念頭に置きながら、
そこで声の文化の特徴を探ってみよう。声が持
つ特徴の一つは、焦点がありながら、場に響いていく

ということである。また、声の大きさの調整が出来、かつある程度、方向性を持つことがある。そこで、独り言、一対一、一対大勢といった様々な関係を取り結ぶことを可能にする上に、それが厳密には守れないという特徴が生まれる。独り言のつもりでも他者に聞こえる。相手に話したつもりでも、他の人もその場にいれば聞くだろう。逆に、そのつもりでも、相手



には聞こえていないかもしれない。考え込むような声はその人の内側へと反響し、相手に聞き取ってほしい声は相手に飛び込んでいくように響く。大勢に語り掛けると、声は広がっていく。そして、それらの特性は、どんな声でも多かれ少なかれ並列的に持つものである。内に響かない声はなく、だから、その人の語る声なのである。

声は物理的に届くだけでなく、常に、気持ちを表し、感情を伴う。言葉で表す以上に直接に現れるようを感じられる。その気持ち・感情は相手を巻き込むものである。感情がそもそもそうであり、その上、声が聞く側も包み込むからであろう。

声はまた、複数の人が語るときに、ハーモニーを作り出す。多用な声が響き合い、一つの音楽のように混じり合った声の流れを作り出す。交替で話すにしても、一緒に声を出すにしても、そこに音の調和が生まれ、異なる声の調子の対照が生まれる。声を出すことは一人の作業でありながら、ハーモニーの中で、共同

の調子が形成されるのである。声には、本来的に、個性と共同の関係の芽が含まれていてる。

定型性と現在性

オングの指摘するように、声の文化は、型通りの決まり文句を多用する。だがまた言葉の意味が現在の状況とやり取りから生まれることも確かである。オングは両面を指摘しているが、その研究が伝統的な文化での口承文芸を題材にしていることもあり、記憶の負荷とそれを軽減する方策の分析に寄っている。小さい子どもを見る限り、人前で口誦するような、多大な記憶の負荷を必要とする課題ではない。むしろ、現在のやり取りによって言葉が生まれ、意味が規定される面が強い。

だが、またまさに現在に生きることにより、その決まり文句に血を通わせるのも子どもの特徴である。その声の調子や表情、またちょっとした言葉の場に応じた違いなどが新たな意味をそこに作り出す。少なくとも子どもの気持ちが自在に動いていればそうなるだろう。

決まり文句的な定型的な面が小さい子どもでも重要なのではない。いやむしろ、多くの子どもの行動は一見したところで定型的である。例えば、茶碗があれば、飲む真似や、乾杯したりする。食事の時は、「お

いい」と言う。決まりきった型の遊びをし、同じような状況なら同じような言い回しをする。言葉にせよ行動にせよ、そのレパートリーは少ないのである。それはむしろ当然のことである。少ないなりに多様な状況に対応するには、型で対応できるものは出来る限りそうしなければ、生きていけない。記憶の力も乏しいから、決まり文句を使うことは役立つ。決まり文句とまで行かなくても、同じ言い回しを繰り返し用いる。また、言葉遊びなど決まり文句や繰り返しの面白さを利用した遊びである。

いしい」と言う。決まりきった型の遊びをし、同じような状況なら同じような言い回しをする。言葉にせよ行動にせよ、そのレパートリーは少ないのである。それはむしろ当然のことである。少ないなりに多様な状況に対応するには、型で対応できるものは出来る限りそうしなければ、生きていけない。記憶の力も乏しいから、決まり文句を使うことは役立つ。決まり文句とまで行かなくても、同じ言い回しを繰り返し用いる。また、言葉遊びなど決まり文句や繰り返しの面白さを利用した遊びである。

ある。砂場遊びでも積み木でも、子どもはその対象に對して働きかけている。他の子どもや保育者とのやり取りは、その物への働きかけの流れにいわば棹指することである。その場合、声を使うことは、その働きかけ動きに対しても関わることを可能にする。声は動きに対して外から関わることを可能にする。声は動きに対しても重複できるからだ。そこで声による言葉は対象や動きとの関連で理解される。声による言葉は、動きが作り出す流れそしてその流れの生じている小さな場に関与し、そこで流れに意味の修正を加える。子どもにおける言葉とはそのような動きの場において、動きとは別の次元からの関与を可能にするものである。

あいまいさ、聞き忘れ、矛盾

声は生まれては消えていく。だから、実は、必ずしもその總体を適切に理解される保証はない。小さい子どもが声による人とのつながりに入り込むとすれば、それは、ゆるやかなつながりのはずである。言われた

ことのあるところは忘れるだろうし、そもそも、気づいていなかつたり、無視したりするだろう。自分の言うことだつて、先ほどのことを忘れ、関係のないことや矛盾したことと言うかもしだれ。一貫性が乏しいどころか、相手とやり取りすること自体に継続して集中しているとは限らない。他の注意を引くものとの間で揺れつつ進むのが、小さい子ども同士のやり取りである。子どもと大人のやり取りが一貫し、つじつまが合うように見える相当部分は大人がうまく調整しているのである。あるいは、一貫するところだけを注目するからそう見えるのであり、子ども同士でも話が通じるようになるのは、互いに適当な部分を注目し、適当に無視し合っているからこそである。これもまた、小さい子どもの未熟さが声によるやり取りと見合った特徴を作り出していることの現れである。

(お茶の水女子大学)